

COVID-19 に脳卒中を発症した患者の臨床的特徴を明らかにする研究

木村和美

学校法人 日本医科大学

【研究の背景】

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大は、国民の健康、経済、医療に甚大な影響を与えており、未曾有の国難と言える。2022年9月末において、わが国では第5波のピークは超えたものの、約170万人の感染者数、1万7千人を超える死者が出ている。また、アジア、欧米諸国での状況から今後も容易に収束する見込みはないと考えざるを得ない。

【目的】

COVID-19 関連脳卒中の報告は、その多くが海外からであり、日本からの報告は少ない。わが国の COVID-19 患者に脳卒中が発症した患者の臨床的特徴の詳細を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究は日本脳卒中学会の承認を得たのち、全国の一次脳卒中センター約1000施設に研究参加を依頼し、563施設から参加同意を得た。2020年4月から調査を開始し2022年5月末で修了した。各施設の尽力により、患者背景、採血データ、COVID-19 治療、脳卒中病型、脳梗塞治療、転帰などのデータが集計された。

【結果】

最終的に165例が登録された。平均70.6歳、男性109例(66%)、脳卒中病型は脳梗塞が136例(82%)、脳出血が21例(13%)、くも膜下出血が6例(4%)、TIAが1例(2%)であった。脳梗塞分類は心原性脳塞栓症が41例(30%)、アテローム血栓性が26例(19%)、ラクナ梗塞が13例(10%)、その他が56例(41%)とその他の脳梗塞が多い結果であった。主幹動脈閉塞は82症例と多く認められ、そのうち、ICA閉塞が24例(29%)、MCAM1が23例(28%)であった。血行再建療法を行った23例のうち、t-PA単独投与は7例(23%)、機械的血栓回収単独(MT)が16例、t-PA+MTが7例(23%)であった。転帰はmRS5-6が63例(39%)であり、転帰不良例が非常に多かった。

【考察】

COVID-19 患者に脳卒中の発症は、欧米にくらべかなり少ないと思われる。重症 COVID-19 患者に脳卒中が発症することが報告されており、わが国においては、COVID-19 患者は、軽症が多く重症者は少ないため、脳卒中の発症が少ないのだと推測される。しかしながら、一旦、COVID-19 患者に脳卒中を発症した場合は、転帰不良となる。

【臨床的意義・臨床への貢献度】

COVID-19 患者の重症化を防ぐことが、脳卒中の発症を抑えることにつながると思われる。